

## 「木の名前・鳥の名前」

講演／佐佐木幸綱

## アニミズムの心

今日は「木の名前・鳥の名前」ということで、名前についてお話をしたいと思いません。固有名詞です。

私は、去年「アニマ」という歌集を出しました。そして、歌壇で「アニミズム」ということが言われている。やはりアニミズムの心が大事なんだと思っています。人間だけではなくて、あらゆる事物に命、魂、心があるという考え方は、ここにあるコップにも、あるいは飛んでいる鳥にも、草花にも、あるいはこうやって喋っている言葉にも、言葉という言葉がありますけれども、魂、命、心があるのだという考え方であります。

その時に、鳥一般に命だとか魂があるのではなくて、飛んでいる一羽の雀、そこにいる一羽の雀に一つの魂がある。花や草み

んな魂があると漠然と考えるのではなく、ここにあるこの一本の草に命があり魂があるのだという考え方で。

初恋のことを思い出していただくと思います。私は電車に乗って通っていいです。女学生でなんとなく感じのいい人がいて好きになります。その時に、まず最初にその人の名前を知りたいというふうに思いませんか。電車の中の女学生がみんな好きなわけではなくて、やはりその女学生が好き。その女学生が好きだということは、その人の名前を知りたいということになるのではないかと思います。

今日は、歌の中でそういうことを考えてみようということなんですけれども、これはつい先日、私が担当しております新聞の歌壇で選んだ作品です。

露の薔薇虎杖蕨伸び谷川に沿い春上

りゆく

京都府の西岡紀子さんの作品です。露の薔薇、虎杖、蕨、四つの植物の名前が出ています。春の若草が美しい色をして、そして、谷川に沿って春が上っていくと漠然というのではなくて、「露の薔薇」と、きちつと名前を言う。そのことでこの歌の一つの特徴が出ています。この方は本当に植物たちが春になってその命を充実させていく様子を、アニミズムの心を持って詠っておられる。その感じが出ている歌だと思いました。

## 名前を覚える

最近是我々は名前を覚えなくなってきた。鳥の名前も木の名前も、特に若い人たちはあまり覚えなくなっている。愛情が少なくなつたのか興味なくなつたのか、どうも私たち歌人は、名前を覚えるのが下手になつてきている感じがいたします。俳句の人は季語を入れますから植物の名前とか鳥の名前を覚えるのは必須条件ですが、短歌の人はそれがありませんから割と無頓着でいるのではないかと感じます。

斎藤茂太さんという方がおいでになります。斎藤茂吉のご長男です。斎藤さんはご

存じの通り、大変、飛行機が好きなのです。

飛行機の話がこの間テレビでしておられるのを聞きましたけれども、飛行機に乗る時に必ず手帳に機種と機体番号を書くというのです。

それから、飛行機に乗って出発する前に必ず機長、スチュワーデス、チーフ・スチュワーデスの名前をアナウンスします。それをちゃんとノートに書いておくそうです。

そうすると次にどこかに行った時に、あつ、また同じ飛行機に乗ったとか、あの時と同じ機長だとか、すぐわかるというのです。

ただ漠然と飛行機が好きだ、漠然と飛行機に乗るというのではなくて固有名詞で名前



を書き留め、一つ一つの飛行機の個体と付き合う。名前をきちっと覚えて付き合うということをやっているのです。

私たち、自然を愛するとか地球を愛するとか言いますが、漠然と地球を愛するということはできないわけで、どうするかというと、例えば草花の名前をちゃんと覚える。単に雑草というのではなく、車前草とか蚊帳吊草とか、それぞれの名前を覚えながら、その個体と丁寧につき合う。そういうことがどうしても大事になってくるのではないかという気がいたします。

### 日本人と固有名詞

日本人はもともと、名前とか固有名詞を覚えるのが大変得意な種族であるようです。出世魚というのがあります。同じお魚なのだけれど、小さい頃はワカシで、次にイナダ、そしてワラサ、一番大きいのがブリというように、だんだん名前が変わっていく。そういうふうには、非常に細かく丁寧な個体と付き合う。こういうのはどうも他の言語を喋っている人たちが、他の民族の人にはないというふう聞いています。

万葉集には大変たくさんの植物の名前が出てまいります。万葉集は長歌、短歌含めて、全体で四五〇〇の歌があります。その中の一五〇〇首に植物の名前が出て来ます。つまり万葉集を読んでいると、(これは延べ数で、一首の中にたくさん出てくるのもありますから正確ではありませんけれど)、数字でならずと三首に一首は植物の名前が出てくる。びっくりするぐらいたくさん植物の名前が出て来るわけです。

萩の花尾花葛花などしこの花女郎花  
また藤袴あさがほの花

旋頭歌です。山上憶良の歌で、秋の七草を全部詠みこんでいます。花の名前だけでできていて、あと、動詞も形容詞も入っていない、一首の中に七種類の植物が入っている珍しい歌であります。

梨なつめ黍に粟継ぎ這ふ葛の後も逢  
はむと葵花さく

これは作者未詳の歌です。梨、なつめ、黍、粟、葛、葵、六種類の植物が出てまいります。いろんな植物が次々に花咲いて、そして実が実るけれども、君に逢わないできている。いずれ後に逢おうと葵の花が咲

いている。「葵」と「逢ふ」、これが掛詞になつてゐるわけです。それから「粟」というのがあります。これは逢わない、逢う、逢わないというふうな、これも掛詞になつてゐるわけです。そうした植物の名前の発音と君に逢う、逢わない、必ずいつか逢おうというふうな気持ち等を重ね合わせてゐる歌です。「這ふ葛の」というのは葛という植物は蔓性で、ですから枝分かれする。枝分かれするけれども、必ずまた先になつて一緒になるというので、「這ふ葛の後」も逢うというふうな形につながつていく序詞であり、かなり技巧的な歌です。六種類の植物の名前を詠み込んでいる歌で、かなり遊びの要素の強い歌です。植物の名前に対する興味を万葉集の時代の人たちが大変強く持っていたのだということがしのばれる作品だらうと思います。

こういう古い歌を見ていますと、本当に日本人は具体的に、個別的に名前を大事に考へているということがよくわかります。色の名前があります。大体日本の色の名前というものはものをそのまま出していく。桃色とか桜色、スミレ色、藤色、牡丹色、

山吹色、藍色、そういうふうには植物の名前を言つて色を付ける。これが非常に多いです。動物なんかもそうです。鶯色とか鶺鴒とか、鳥の名前を入れたりします。あるいは茶色はお茶の色です。灰色、金色、銀色は鮫物の名前です。日本人は非常に具体的な名前でも識別をする。そういうふうな世界と付き合つてきた。私たちにはきつとそういう才能があるのだということに改めて考へてみたような気がいたします。

### 西行の歌に見る固有名詞

万葉集以来、たくさん出て来た歌人の中にそういう固有名詞が得意な歌人と、あまり得意ではない歌人がいるのです。万葉集があつて牧水があるわけですけども、その中間の人では、私は西行法師が抜群に固有名詞が多い人だと思います。西行の歌には勅撰集では詠われないような鳥も含めて全部で二九種類もの鳥の名前が出て来る。勅撰集をお読みになると鶯とか雁とかホトトギスとか千鳥とか、古典の中に飛んでいる、いかにも短歌っぽい鳥がいるわけですから、カラスとか雀とかフクロウとか勅撰集

にはほとんど出て来ない鳥も西行は断固詠う。

また西行には九種類の虫の歌があります。それから魚介類、これは大変、数があり二四種類を詠い込んでいます。皆さん、自分は今まで作つた中に魚介類をどれぐらい詠つただらうか、あるいは鳥は何種類ぐらい出てくるかと思つてみると、西行の二九種類の鳥、二四種類の魚介類というのは圧倒的に多いというのはおわかりになるだらうと思う。さらに獣類、これは割と少ないのですけれども五種類。そして植物、これはなんと六四種類。大変な数です。西行は海草類、これも七種類詠つています。

『山家集』という西行の歌集をお読みいただければわかりますが、具体的に一つ一つ名前を歌の中で挙げる。それも、先ほど申し上げたように、松とか萩とか梅とか勅撰集に出て来る植物、短歌界のスター、古典の中のスターである植物だけではなくて、本当に名もない、我々が雑草と呼ぶような草だとか、雑木林と言つちやうようなクヌギだとかナラだとか、そういうのまで含めて西行は固有名詞をたくさん使つています。

そういう角度から、興味を持って西行をもう一回読んでいただくと、違う西行が見えてくるのではないか。やはり西行は自然を愛し、今の私たちの言葉でいうと、「地球を愛す」、そういう宗教者、坊さんであり、歌人だったということが改めて見えてくるような気がいたします。

## 牧水と植物の歌

これから、牧水の話をしていきますけれども、牧水はやはり群を抜いて植物の名前が



多い、それから鳥の名前が多いです。牧水は好んで旅をするわけですが、深山幽谷の旅をするのではなくて、人里と山との境界のようなところを旅する。また、西行のように一年にわたってというのではなく、数日、旅をする。そういうふうな旅の仕方でもありますけれども、植物だとか鳥だとかに對して大変細やかな気を遣っています。

牧水の場合、植物や鳥に最初から興味があったのかというところではなくて、どうも自ら興味をかき立てるといいますか、興味をとぎすますといいますが、興味を育てるといいますか、そういう努力をしていたように私は思います。そのことをお話ししたいと思います。

『溪谷集』という歌集は、牧水の一、二番目の歌集で、この年、牧水は三四歳です。鳥の名前とか、あるいは草木の名前が具体的に増えて来るのはこの『溪谷集』の辺りからだろうというのが私の見解です。

白鳥は哀しからずや空の青海のあを  
にも染まずただよふ

「白鳥は」というのは白い鳥はという意味でしょう。どうも、かもめらしい。かもめ

らしいのですけども、かもめと言わないで「白鳥は」ってなことを言った。漠然と白い鳥なんて言っているのではだめで、きちっと鳥の名前を出す。きちっと植物の名前を出す。そういうふうにしなないと自然を詠う歌人、牧水はだめになるぞということをお牧水はこの前後に思い立ったらしい。酒ばかり飲まないで少しは植物の名前を覚えよということはどうもやったような感じであります。

〈貧しき庭〉という作品、これは『溪谷集』の中に出てまいります。

たけ高くわれ越ゆべしとおもひるし  
鶏頭は尺に足らで花咲けり

ずうっと背が高くなってから花が咲くだろうと思っていたのだけれども、尺に足らないで、尺よりも小さい時に花が咲いちゃった。おや、と思ったという歌です。観察していた感じがわかるでしょう。牧水は相当興味を持ってこの鶏頭を見ていたらしいことがわかる。

酒のみの主人とおもへ庭の隅に植ゑ  
られし草胡椒青藜

藜というのはご存じのように鮎のかけ酢、

夢酔にしたりします。酒を楽しく飲むとうとうのでこういうのを大事に植えて。

わが庭の紫苑ダリアの花かげに夕晴

れぬればうごく風みゆ

ダリアや紫苑が生えている辺りを静かに見ている。チラッと見たのではなくて視線が固定化されています。だから動く風が見える。何秒間か何十秒間か草花に視線を注いでいる、その動かない視線がテーマになっている歌だと思います。こういう歌が〈貧しき庭〉に出てまいります。

この〈貧しき庭〉というのはどこなのか。牧水は大正九年に沼津に引っ越します。この歌集は大正七年の話ですから沼津に引っ越す前です。その前は東京市巢鴨町一二五〇番地というところに住んでいました。ある人が住んでいた家を、改めて借りたのだと思います。前の人が庭に植えたものはみんな持つて行っちゃって、庭を更地みにして行ってしまった。それで急に思い立ってそこに自分で植物を植えてみようと考えたということです。

若山牧水という人は宮崎県の山の中、東郷町というところで医者の子として生ま

れました。家の人たちは医者を継いでほしいと考えていたのですけれども、上京して早稲田大学に入学をいたします。なぜ早稲田に来たのかというと坪内逍遙に憧れていたのです。坪内逍遙の英文の授業というのはこれはもう天下の中学生の憧れの的でありまして、なんとか坪内先生の講義を聴きたい。その一心で早稲田に入ります。したがって牧水は英文科を出ます。そして新聞社に勤めたりして東京で生活をします。ですからほとんど畑仕事をしたことがなかった。それがこういう機会に実際に植物を育ててみる。自分で苗を植える。可愛いですよ。

そうするとやはり名前も覚えすし、枯れてないだろうかとか、やっつと、こいつ花が咲いたとかね。「おまえ頑張れよ」「可愛いな」と話しかけたり触ったりするようになる。そうしたことが一つのきっかけになったのではないか。〈貧しき庭〉の歌は大した歌ではないというふうに私は思いますが、すけれども、こういう事情で植物と新しい交際を始めた頃の牧水の歌だと思って読んでみますと、これはこれではなかなか味わい

のある作品だと思います。

この『溪谷集』の一番の中心はその次にある〈秩父の秋〉という歌です。一二月の半ばに秩父に行きまして三泊で一九〇首を作り、そのうち九六首を歌集に収録をいたします。それがこの〈秩父の秋〉という一連になっているわけです。

ひとよさの泊りの瀬戸辺おもはぬに  
杉の花咲けり枝もとををに

一二月の半ばであります。春先だったら杉の花が咲いていてもいいのだけれども、一二月半ばに杉の花が咲いている。「おや」と思った。その「おや」と思った気持ちがこの歌になっっているのです。やはりこれは観察しないとわからない。杉がいつ頃花咲くのかというのを知っていないとなかなかこういう歌は作れない。

斯くばかり紅葉するものと知らざり  
き木苺の葉を摘めば枝さへ

木苺を摘んだら枝まで紅葉をしていた。「紅葉づる」というのは「紅葉する」という意味の動詞であります。木苺が紅葉するのは知っていたけれども、枝まで色が変わっちゃうというのは知らなかったよ。これ

もやはり植物に対する興味、植物もきちつと命があるのだよ、植物にも心があるのだよ、植物にも魂があるのだよというアニミズムの心がないと、こうまでは細かく見ないでしょう。

杉落葉しげき溪間の湯のやどの屋根  
にすてられし白き茶の花

山に行きますと、道より低いところに屋根がある場合があります。下のお宅の。で、その屋根の上に誰が摘んだのか白いものがある。何だと思つて見たらそれはお茶の花だった。これもよく見ないとわからない。

ひこばえの櫛の小枝に実のなりてつ  
ぶつぶと見ゆもみぢ葉の影に

紅葉葉の影に小さく櫛の実がなっている。どんぐりです。これも丁寧にかく観察して見ないとなかなか見えない。そういうところを詠っています。

岩はしる滝津瀬のうへに古榎ふるのき榲す植うゑ  
並なめ住すみ古ふるりし見みゆ

古榎ですけれども、古榎であり古榲すなのだろうと思います。いかにも長く住んでいるような感じのお家があるよ。庭には年寄りの木が並んで仲良く立っているよ。なか

なかい感じだと思ひます。

榲す榎のきわかき木どちの黄葉して押しひ

ろこれり此処のいただき

榲すと榎のきの、これは若い木同士が並んで一緒に手を広げているよ、このいただきで前の歌があるから一層いいでしょう。これは歌集では並んでいるわけではなく、私が並べたのですけれども、こっちは若い木同士が一緒になつて一生懸命手を広げているよという歌であります。

古杉と苗植ゑなめしわか山とならび  
てはれぬ秋のよき日に

一二月です。もう秋の終わりです。古い杉林があつて、そしてこちらには植えられたばかりのまだ若い杉山があつて、そして、そこにいい感じで秋の日が差しているよという歌であります。

ここにはちゃんと榎とか榲すとか榎とか榲すとかか杉とか、植物の名前が具体的に出ています。こういうものを見ると、牧水は「旅の歌人」とか「自然の歌人」と言われますが、極めて意識的に、具体的に木々と付き合っていた。この若い杉には、この若い榎の木には、この古い榎にはというふう

体的に一つずつ、個別的に見ています。その木々に、その木の魂がありその木の命がありその木の心があるということをお水はきつと見ていたのだらうと思ひます。

牧水という人がお好きな方は全集を読んでいただくと思います。最初は本當に「白鳥は」みたいな、漠然と鳥を詠う、木を詠う、草を詠うというやり方をしてきたのですけれども、この『溪谷集』辺りから非常に具体的に名前と付き合うようになってまいります。「木の名前・鳥の名前」が大変具体的に増えてまいります。

名前にこだわつて名前を覚える。名前を具体的に考えるということはどういうことなのか。やはり世界との付き合い方なのだろうと。

短歌を本気になつてやる時は、自分自身の世界との付き合い方をきちつと点検してみることがある。その時に、名前、固有名詞は一つのポイントになつていくだろうと私は考えています。

(拍手)